

Title	中山間地域社会の活性化における新規参入者の位置づけ：新規参入者，受け入れ団体，地域社会の関係を中心に
Sub Title	
Author	土居, 洋平(Doi, Yohei)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.) ,p.83- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000054-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「外」とが互いに助けあい、補完しあい、さらに両者を融合させるための包括的な教養なのであり、それゆえ孔子はこれを学問の最終段階に位置づけたのである。

以上は、孔子の音楽教育思想に関する考察である。清末から民国にかけて活躍して、中国近代音楽教育の基盤を築きあげた知識人は、留学するまえに伝統的な儒教教育をもうけていた。彼等は如何に音楽をとらえ、そして

音楽の人間形成に対する役割に対して如何に認識したのであろうか？とりわけ、西洋音楽を受容するにあたって、彼等自身のなかに既に出来上がった儒教（特に「礼楽」）思想の枠組みは如何なる働きを果たしたのであろうか。儒教の開祖である孔子の音楽教育思想の特質を踏まえながら、以上の問題に留意し、今後の研究を展開していきたい。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

中山間地域社会の活性化における新規参入者の位置づけ

—新規参入者、受け入れ団体、地域社会の関係を中心に—

土 居 洋 平*

1. 研究目的

近年、中山間地域においては過疎化と高齢化が著しくなりつつある。高齢化は全国的な現象であるが、各種の条件が不利である中山間地域では、とりわけ状況が厳しく、高齢化率も5割を大きく超えるところが多い。近年こうした地域において注目されていることが、UJIターンなどによる新規参入を活かした地域づくりである。こうした外部からの人口流入を前提にした地域活性化が注目を集めるのは、多くの中山間地域の場合には人口流出と高齢化の結果、自前での社会の維持が困難になりつつあるからである。また、とりわけ90年代以降、男女ともにIターンをする若者ないしIターンを希望する若者が増加してきているという背景もある。UJIターンについては、既に70年代から大きくとりあげられてきているが、「若者による単身の、しかも出身地域とは異なる地域への新規参入」という現象は、近年に特有の現象といえることができる。

しかし、こうした新しいタイプの新規参入については、その効果や短期的な定住への制度的支援のあり方を分析したものは多いが、その過程の分析、とくに新規参入にかかわる主な主体である、参入者、受け入れ団体、地域社会の関係をとり扱った研究は意外なほど少ないのが現状である。そのため、このような新しいタイプの新規参入者が地域社会においてどのような位置に置かれているのか、また、新規参入者と受け入れ団体、受け入れ団体と地域社会、新規参入者と受け入れ団体の相互の関係がどのような状態になっているのかについては、未だ

明らかにされていないのである。そこで、本研究においては、この3者の関係を明らかにし、中山間地域の活性化という文脈の中で、新規参入者が置かれた位置について検討を行い、彼らが「定住」し得るかどうかについての考察を行った。

2. 研究の意義と方法

まず、事例について検討する前に、中山間地域へのUJIターンに関する先行研究について、中山間地域の活性化と人口流出の議論を中心にその整理を行った¹⁾。その結果、とりわけ農業外への新規参入について先行研究においては、ほとんど扱われていないことが明らかにされた。しかし、近年の中山間地域への新規参入希望者は必ずしも農業への就業を希望しているわけではなく、ライフスタイルとして農的な暮らしを希望している場合が多い²⁾。こうした現状を踏まえれば、先行研究においては現状を把握しきれていないといわざるをえない。

そこで、本研究においては農業への新規参入および農業外への就業するかたちでの中山間地域への新規参入の事例の両方について検討を行うこととした。事例と着目点については、次節のとおりである。

3. 事例

事例においては、新規参入者本人に着目し、その経緯とそこにおける各主体間の関係について検討を行った。具体的には、島根県弥栄村「やさか共同農場」をその研修生のN氏を中心に、福島県昭和村「からむし

織姫制度」をその研修生の F 氏を中心に、長野県飯山市「なべくら高原森の家」をそのスタッフ（自然インストラクター）の K 氏を取り上げた。この 3 つの事例を選択した理由は、以下のとおりである。

第一に、先に示したように、I ターンに際して希望する職種には多様な形態があった。そのなかでも我々が行ったアンケートには、そのうちの上位 3 つに「農業」「伝統的な産業」「インストラクター等」があることが示された。今回の事例は、その上位 3 つである新規就農 (N 氏)、伝統産業 (F 氏)、自然インストラクター (K 氏) をとりあげるにより、(農業に限らない) I ターンの多様な形態を少しでも示そうという意図がある。

第二に、今回の研究においては、成功していると思われる事例においても I ターン者と地域社会の間にはズレが存在する可能性があることを注目していることがある。ここでとりあげた 3 つの取り組みは、いずれも地域社会との関係も良好に保ちながら都市部から移住を受け入れ続け、移住者が一定の割合でそのまま当該地域に留まっており、I ターンの成功した地域として考えられている事例である。こうした事例のなかでの I ターン者と地域社会の関係の意識の相違を考えることで、I ターンにおける問題について考察を深めていきたい。

第三に、今回とりあげていく N 氏、F 氏、K 氏ともに 20 代から 30 代の独身の女性であるが、とりわけ近年の I ターンに特徴的な現象である若年層の単身女性の I ターン者に焦点を当てることで、近年の I ターンに特徴的なありかたや問題を示していくことを意図している。

なお、事例のなかにおいては、①当該地域の概況と受け入れ制度・団体の成立の背景と経緯、②当該地域へ I ターンした人々の移住経緯と地域に対する考え、③地域社会の人々の I ターン者への考えに着目した。そのうえで最後に、地域社会と I ターン者の視点のズレの存在や I ターン者の定住可能性、中山間地域社会への貢献について検討を行った³。

4. 研究の成果

本研究でとりあげた 3 名の I ターン者の特徴をまとめてみると、以下のことを示すことができる。

第一に、「自然」「環境」「農業」「伝統文化」といった農村部にあるなんらかの資源への強い関心があり、それに対して積極的な意味づけを行った上で移住しているということがある。N 氏の場合「環境」と「農業」、F 氏の場合「伝統文化」、K 氏の場合「自然」であった。彼女たちは、所得というよりもこうした農村資源を生かしたラ

イフスタイル、それを重視する価値観に基づいて移住を行っているのである。

第二に、上述の理由で移住をした経緯から、当該地域自体に対してはこだわりがそれほど大きくないということがある。つまり、今回とりあげた I ターン者にとって受け入れ地域社会は、自らのライフスタイルや価値に適合的な場所のひとつとして選択した場所なのであり、場合によってはより条件の合う地域への移住する可能性もあるのである。とりわけ今回取り上げた 3 人の場合には I ターンをしてからの時間も短く、今後にどのような選択をするかは不透明な部分が多い。

これに関連して、受け入れ団体、地域社会についても、以下のことを指摘することができよう。まず、受け入れ側の視点としては、当然のことではあるが、I ターン者にはそのまま地域社会に留まって欲しいということがあった。やさか共同農場の場合は、研修生は地域に残るという前提で研修を行っていたし、からむし織姫制度においても、最近では研修終了後の雇用先の確保など、研修生に残ってもらおうという努力がなされていた。また、なべくら高原森の家の場合には、常勤スタッフとしての採用とともに、地域への定住が前提とされている。

こうしたことから、I ターン者と受け入れ地域社会の間に、二つの点の意識のズレがあることを指摘できよう。

第一に、定住に関する意識の相違がある。すなわち、概して地域社会の側が定住を求めているのに対して、I ターン者の側は受け入れ地域社会へのこだわりというのが、それほど存在していなかった。I ターン者の側が惹かれたのは、あくまでのそこにある「農業」や「自然」「伝統文化」といった資源なのであり、地域社会それ自身ではない。

第二に、I ターン者の立場に関する意識の違いがある。I ターン者は、「農業者」「自然インストラクター」「伝統工芸の継承者」というつもりできているのであるのに対して、受け入れ団体もそういう名目で I ターン者受け入れを行っているのであるが、もともと単身の若年女性の少なかった中山間地域においては、彼女たちに「嫁」としての期待を強く持ちやすい。とりわけ昭和村の「からむし織姫」の場合にはそもそも若年女性へ向けて制度であることから、この傾向が強く存在していた。そして、そうみなされることに対して、I ターン者の側からの失望の声があがっていたのである。

ただし、こうした意識の相違があるとはいえ、中山間地域社会に対して I ターン者が新たな可能性をもたらし

ている。

第一に、中山間地域にある資源の再評価をもたらしているということがある。「農業」「自然」「伝統工芸」といった中山間地域に従来から存在していた資源も、これまでは地域社会の内部ではそれほど評価されていなかった。しかし、Iターン者とその資源を評価し移住してくるにより、地域の中においても自らの資源についての再評価をもたらしている。そして、その資源への再評価から、地域社会の再編成がもたらされる可能性もあるのだ。例えば、弥栄村の有機農業を中心とした集落単位での農業、当地での加工と産直販売の導入などは、やさか共同農場とその研修生たちによって触発されたものということができる。また、昭和村の場合、「織姫」制度の反響が非常に大きなことにより、地域での「からむし織」の再評価され、からむし織の振興策がとられるようになったのである。

第二に、今回みてきたようにIターン者の受け入れ地域社会事象へのこだわりがそれほど高くなく、定住というよりもより条件の適合する場所をみつけた時には移動をする「暫定居住」の状態であるとはいえ、彼らの求める条件に適合的な場所とは、別の中山間地域である可能性が極めて高い。つまり、結局は「離都向村」の移動をする可能性が高いのである。

この「暫定居住」をしているとみなされる立場については、それ自身に意味もある。仮にIターン者が仮に地域社会に定住した場合には、Iターン者としての特性は失われ、新しく地域社会の資源の再評価などはできなくなる可能性があるからである。70年代にIターンした

「やさか共同農場」の代表のSさんも、未だに地域社会の中に同化したとはいえず、村の中の政治的な関係には触れていなかった。Sさんは、少なくとも自分の代では「地域と同化することはない」と語り、「我々は、いくら村に貢献しても、生え抜きに離れない」ともいっている。Iターン者は、どこまでいっても地域社会にとっては「暫定居住者」とみなされる傾向があるのだ。

しかし、そのことを「地域社会に定住者として迎え入れられない」というネガティブな視点でとらえるのではなく、それまでの地域社会の論理ではない視点で語ることができるというポジティブな視点に変換してIターンを捉える必要がある。というのも、今まで見てきたように、そうした「暫定居住者」だからこそ、外部の視点によって農村資源の再評価をもたらせるのし、もし地域と自らのライフスタイルがぶつかったときに別の中山間地域にいくという選択肢を選べるのであり、つまりはこの「暫定居住者」としての特性がIターン者の地域社会への効果やその強みを支えているということができるからである。

注

- 1 この成果は、研究ノート土居洋平 細川甚孝 渡邊めぐみ 2002（刊行予定）「中山間地域研究の展開と今後」『Sociology Today』（12）にまとめている。
- 2 これについては、土居洋平「Iターンをめぐる都市の視点と農山村の視点～東京シンポジウム、地方シンポジウムアンケートより～」(社)農村生活総合研究センター『Iターン女性とともに創る魅力的な田舎暮らし：中山間若者定住対策シンポジウム報告書』(社)農村生活総合研究センター、2001年3月、67-84頁を参照のこと。
- 3 事例のそれぞれについての検討は、ここでは省略する。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

- ・空間性に力点を置いた、都市社会の解明のための理論研究
- ・都市理論の認識論的視座を明確化させるための経験的研究

福 田 光 弘*

第一の研究課題である「空間性に力点を置いた、都市社会の解明のための理論研究」については、H.ルフェーヴルの思想をよりどころに考察を続けてきた。ここで改めて空間ではなく「空間性」とした理由は、本研究が現代世界に特有な空間の性質を探ることにある。よって本研究は、空間そのものの存在論的な根拠を探るものでは

ない。より厳密に言えば、ルフェーヴルが抽出した空間性を明確化するために、現代世界における日常生活すなわち「日常性」の問題を中心に考察してきた。

ルフェーヴルが日常性を記述するさい、そこに空間性はどのような認識論的な意味を持つかを解明することを試みた。そのために、彼の「日常性」を記述する理論枠